

《正岡子規（36）の続き》その290

天涯茫茫生

列伝⑥ 夏目金之助（号・漱石）  
享年50歳

生年 一八六七（慶応三・一・五 太陽  
新曆二・九）  
歿年 一九一六（大正五・一二・九）  
死因 胃潰瘍

共に東京大学予備門に入学（明治17年9月）したが、親交を結ぶやうになったのは22年1月からである。以後、子規の死まで13年余の交際中にも、漱石の松山中学赴任、熊本第五高等学校教授、英国留学など、それに子規の従軍など、共に同一土地に暮さぬ月日もあったが、終生子規の死まで親交はかわらない。子規は漱石を、英学にも通じ、漢文にも長ずる千万年の一人だと評した。それは漱石の房総紀行『木屑録』〔漢文の詩文集〕を評した言葉である。尤も漱石はこれを「千万人中の一人」と誤記しているが、無論同じことで、めったにない天才ということだ。明治22年9月のことだから、交りを結んで直に、相手の才能を見破ったことになる。

これに対し漱石は、子規の初期の咯血（明治22年5月）に対する書簡に、山崎元修の如

き不注意、不親切なる医師（東大明治9年卒、当時本郷眞砂町24番地に開業、子規が診察を受ける。小生の調査によれば、決して凡医ではない）にかからずに大病院でしつかり治療した方がいいと忠告している。「小にしては御母堂の為め大にしては国家の為め自愛せられん事」を「御分別有之度」と結んでいる。二人は親交を結んで直ちに相互敬愛の念を発し、互に尊重の意を相手に伝えたようだ。

漱石は子規から何を学んだかと云えば、やはり俳句であろう。松山からも熊本からも多くの句稿を送って批評を乞うている。「善悪を問はず出来た丈け送るなり、左様心得給へ。わるいのは遠慮なく評し給へ、其代りいいのは少しほめ給へ」とある通り、全部を子規に示したもののようである。

俳句の叱正を乞うばかりではなく、漱石の方からも子規に忠告を書き送っている。子規が文章の稽古ばかりしていて、一向にアイディアを養おうとしないことに対し、切実な忠告を送っている。（明治22年12月31日附）

漱石が文名を挙げることとなったのは、子規が松山から東京に引きとって編集に努力した「ホトトギス」に「我輩は猫である」や「坊ちゃん」を載せてからである。共に高浜虚子の推挙による。

漱石には親友として、子規のほかに中村是公（慶応3年山口県生）がいる。東大英法科卒で、学生時代から漱石と親しく、共に本所の江東義塾の教師となり、共に塾の寄宿舎に暮し（明治19年）、この年と明治24年富士山に

登っている。大正4年には湯河原温泉その他に誘われている。

満鉄総裁の時、漱石を満州、朝鮮旅行に招待し、「満韓ところどころ」を執筆させた（明治42年）。

東京市長（大正13年）となり、昭和2年歿した。漱石が死亡のときの葬儀委員長であった。

親友という訳ではないが、知友として畏敬を払い、漱石が多額の恩恵を受けたと書いている人物に池田菊苗（元治元年鹿兒島生）がいる。明治22年東大理科卒。東京高等師範学校教授より、明治33年ドイツ留学。帰朝後、東大教授となり、のち理科学研究所々員となった。昭和11年歿。

明治34年5月ドイツよりロンドンに転じ、漱石の下宿に53日間同宿。殆んど連日、深夜まで談話を交した。

漱石の専門の英文学や、造詣の深かった漢学についても知識の大いにあることに感嘆して、『文学論』著述のヒントを得たという。漱石の談話筆記「処女作追懐談」のなかに、「池田君は理学者だけれども、話して見ると偉い哲学者であったには驚いた。大分議論をやつて大分やられた事を記憶してゐる。倫敦で池田君に逢つたのは、自分には大変な利益であった。」とある。

寺田寅彦宛の手紙（明治34年9月12日）にも、大いに池田氏を称揚し、暇があつたら是非訪問するよう、君の学問にも利益が多いと信ずると書く。菊苗氏は味の素の発明者としても有名である。